

244) 嫁ぐころ

お嫁には持ってゆけない あのころのわたしの写真
アルバムからそっと剥^はがして 燃えさかる焚^{たき}火に入れた
めらめらとわたしの過去が 火の中で灰に変わって
何となくうしろめたさが 前よりも大きくなった

自分でも許せなかった ダイアリーの1ページには
若かったあの日のことが 細い字で記されていた
すぎし日を忘れるために 思い出を細かくちぎり
窓に吹く風に向かって 思い切り吹雪に変えた

嫁ぐ日が近づいてきて 過去の日と別れを告げる
パノラマの景色の中で 野の花をティアラに編んで
花嫁に憧れていた あのころが思い出される
歳^{さい}月^{げつ}はすぎてゆくけど いつまでも子供でいたい

倅^こせは待っていたって 向うからやってこないと
あの人は言ってたけれど 26歳今が潮どき
紅をさす唇さえも あの人に奪われるため
夕陽より紅く染めるわ 新しい明日のために